

# 信 毎 俳 壇 今井 聖 選

春めくやプラスチックが病むことも  
壊れきつな地球に立ちて冬さるる  
米寿夫雪掻きの腰定まらず  
妻と手を組めり雪道ウォーキング  
春浅き展示会場みなマスク  
往診の遷子の見入る花辛夷  
立春や京三条の鯉そば  
啓蟄や諏訪湖廻りのウォーキング  
早春の日を受け障子丸くなる  
大寒や老女の床屋病むと聞く  
霜の夜や玻璃戸に小さき手形一個  
パーラーの入口狭し春の森  
(塩尻市) 神戸 千寛  
(飯山市) 小野沢竹次  
(長野市) 水木 朱実  
(飯綱町) 坂井 春男  
(佐久市) 佐藤 勝子  
(佐久市) 西田 和彦  
(飯山市) 田中 琢雄  
(岡谷市) 川村 修平  
(松川村) 岡 豊村  
(長野市) 三田村義夫  
(佐久市) 木内利一郎  
(小諸市) 加藤 陽介

一句目、プラスチックは生物ではないから「病む」ことはない。しかし病む頭脳が作り出したあらゆる物が病んでいると言えなくはない。「詩」には事実を超えた真実がある。二句目、世界からなくならない戦争の現実からこういう儼然とした思いにとらわれる。三句目、雪掻きをしている米寿の夫を妻ははらはらと見守るしかない。四句目、凍った道は滑るからウォーキングの夫婦は片時も腕を離せない。

選評

## 神野 紗希 選

マグカップ欠けたるバレンタインデー  
枇杷の木や雪こんもりと垂る氷柱  
浅銅飯太金洋の砂を噛む  
水温むシーラカンスの生き延びて  
薄氷に羽化するとき大地かな  
囁やサラダボールの曲げわっぱ  
シウマイ弁当包装紙朱ぞ春の雪  
春風やつま立ちて弾くバイオリン  
萱平始発のバスの氷柱かな  
駅伝の最後の走者待つ重  
吾子を乗せベダル踏ん張る春北風  
樹氷林一手に逃走鹿の群  
(松本市) 伊藤 和夫  
(長野市) 宮沢 義親  
(箕輪町) 向山 政俊  
(立科町) 村田 実  
(飯山市) 田中 琢雄  
(長野市) 荻原 宏祐  
(小諸市) 加藤 陽介  
(長野市) 橋沢 ナナ  
(長野市) せきたつお  
(長野市) 神谷 伸一  
(佐久市) 小栗 晴美  
(上田市) 大久保幸吉

一句目、マグカップの欠損に、幸せなだけではない人間模様、満たされない心が透けて見える。二句目、枇杷の木も雪国ならこんな姿を見せるのか。雪も氷柱も宿す木のたくましさよ。三句目、浅銅の砂を噛みあてたとき「太平洋の砂」だと捉えた感覚がダイナミックだ。言葉の力で日常に大自然を引きつけた。四句目、温んできた春の水には命の気配が濃く寄せる。古代の魚に地球のはるかな歴史を思う。

選評

## 坊城 俊樹 選

秒針の音の尖りて寒の入り  
紐の端咄へ櫓をかける春  
刑場に松一本の余寒かな  
引鶴に神は乗りたり明けの湖  
手枕の痺るほどの春野かな  
春の宵屏の軋む映画館  
をちこちに異仕掛けられ山眠る  
豪商の江戸のよこれや雛の顔  
校庭の人文字はるか鳥帰る  
頬被り明治の父と瓜二つ  
物影へ座布団ほどの雪残る  
巨岩立つ寝覚の床の凍て返る  
(安曇野市) 丸山 進也  
(佐久市) 町田ゆかり  
(松本市) 伊藤 和夫  
(中野市) 石田 正秀  
(佐久市) 木内利一郎  
(長野市) 宮島佐代子  
(飯山市) 小野沢竹次  
(長野市) 武田 芳子  
(立科町) 村田 実  
(大田市) 原田 勝  
(飯田市) 大石 昭重  
(大桑村) 木戸口信幸

一句目、寒に入ると途端に寒く感じるもの。「チクタク」と時を刻む秒針も冷たく尖って感じた。細かい事象を捉えるのも俳句の感性。二句目、春になりいよいよ大掃除の準備なのか。和服の女性は褌姿となる。キリリと紐を結ぶ姿がまた美しい。三句目、江戸時代からある処刑場。そこに立つ松はその目印なのだろう。その松に引き回されて来る江戸時代の光景はことのほか寒さが残る。

選評